シンポジウム　オスカー・ワイルドと「新しい女」

貝　嶋　　崇

オスカー・ワイルドの研究も，没後100周年から6年もたち，20世紀初頭の自伝を中心にしたものから，作品を論じるもの，さらに，21世紀に入り，ワイルドとその作品中の文化事象を取り上げる研究を中心としたものへと様変わりしている。けれども，それは，自伝的な研究が尽くされたことを意味するわけではないし，作品論が最終的な成果を上げたからでもない。新たな文化事象を通してのワイルド研究の主題は無尽蔵に思われるが，それは常に時代が新しい視点を求めているからに他ならない。もっとも，新しい視点が必ずしも，研究の深みを意味するのではない。むしろ，新しい視点とは，その研究がなされるその時代そのものを示す視点に他ならないからだ。

このシンポジウムは，その意味で今日的な視点からの問題提起である。一般的にはフェミニズムやジェンダーの研究は行われてきてすでに久しいが，その視点からのワイルド研究は，マーガレット・ステッツ（Margaret Diane Stetz）の言を俟つまでもなく，まだ，あまり論じられることはなかった。ステッツは，バージニア・ウルフがワイルドを評価しなかったことがこうした一連のワイルド研究を遅らせたと述べている。その真偽はともかく，「新しい女」を軸に，わたしたちは，ワイルドへと近づこうとした。ここで起こる問題の一つは，「新しい女」の解釈であるが，もともと，「新しい女」の解釈には，決定的なものが出ていないことから，それぞれの発表者の解釈する「新しい女」を基軸に発表していただいたことをここに明記しておく。